

こんな看護師になりたかったんじゃない

育児休暇を終える今年の3月、私は内視鏡センターへの異動を告げられた。部署異動は初めての経験であり、はたして仕事と育児の両立ができるのか、病棟経験しかない私に外来勤務が務まるのかと、復帰日まで不安な日々を過ごした。しかし、子どもにとっても私にとっても、新しい生活が始まることは希望のようなものもあった。育児休暇中は第1回目の緊急事態宣言が発出されたこともあり、気軽に家族や友人とも会えず、免疫が十分でないことを思うと子どもと散歩に行くことすら憚られた。右も左もわからない状況で育児が始まり、そこに先行きの見えないコロナ。小さな赤ちゃんと2人きりの生活は、時に涙が出るほどつらく、子どもが同世代の子と関わることができないことも不安だった。そういう意味では復帰を待ち望んでいた部分も大きく、復帰の時を心待ちにしている自分がいた。

配属されてすぐ感じたのは「とにかく忙しい」だった。その頃の日記を見返すと「めまぐるしい」、「仕事ができる人しか働けない部署…」と日々仕事に追われている様子が書かれている。

そんな私がまだ仕事に不慣れな頃に、70代の男性Aさんが内視鏡検査のために来院した。声かけや検査の流れを思うとまだ不安もあったが、ちょうど看護師が出払っていたため、上席者と一緒に介助につくことができず、医師のサポートを受けながら検査が始まった。カメラを挿入してすぐ、私でもその異変に気が付いた。腫瘍だ。しかも、すでに通過障害が起きていそうなほどのサイズだった。ステージもそれなりだろう。すぐに色素散布や造影検査を行うことになったが、不慣れな私は、医師の指示する薬剤や物品をスムーズに準備することができなかった。また、サポートに入っていたのが研修医ということも、医師は研修医とわたしの両方に指示を出さなければならなかった。検査の途中、医師のPHSが鳴ると、少しずつ医師の語気は粗くなった。Aさんも慌ただしい様子に何か感じとったのだろう。現在の状況を問うAさんに、医師は「直腸にできものがあり、詳しい検査をしている。癌だと思う」そう伝えた。検査が終わると、医師は「詳しいことは外来でお話をします」そう言い部屋を立ち去った。Aさんは何か言いたげな表情をしていた。気にはなったが、声を掛けたところで知識不足の私に対応できるのか。そう思うと勇気が出ず、Aさんに労いの言葉を掛けることしかできなかった。検査中も、私は介助にばかり気をとられ、Aさんの表情や言動、思いに配慮することができなかった。それは私が理想とする看護師像からかけ離れた行動であり、こんな看護師になりたかったんじゃない…と、記録を書きながら涙した。



それからちょうど半年が経ち、今度は30代の女性Bさんが他院から紹介されてきた。表情はかたく、誰が見てもわかるほどに緊張していた。私は検査の流れや上手に受けるコツを伝え、Bさんは静かに頷いた。検査が始まり、医師は胃癌であることを伝えた。一瞬、半年前の出来事が頭をよぎったが、考えるよりも先に手が動いていた。私は、薬剤や物品準備など、医師が要求するタイミングで求められた介助を行うことができるようになったのだ。そして、検査中は患者の表情を感じ取り、声をかけ続け、背中をさすった。半年前のような思いはもうしたくない、患者にもさせたくない。その思いが私の行動を変えたのだ。検査が終わり、Bさんは椅子に座って私を待っていた。私は腰を落としたあとBさんを見つめ、「お疲れさまでした。胃カメラつらかったですよ」と声を掛けた。私自身ひと月前に胃カメラを経験していたこともあり、自然と口から出た言葉であった。Bさんは少しこちらに目を向ける

と、静かに「大丈夫です」と言った。しかし、Bさんはあの時のAさんと同じ、何か言いたげな表情をしていた。私が続けて「では…今のお気持ちはどうですか？」と問うと、Bさんの目から大粒の涙がポロポロとあふれた。今日まで不安で仕方がなかったのだろう。もしかしたら癌じゃないかもしれない、そう思っていたのかもしれない。でも癌だった。これからどうしたら良い？そんな思いで胸が押しつぶされそうだったのだろう。それからBさんは静かに床に目を落とすと、抱えていた思いをひとつひとつ話してくれた。わたしは傾聴することに努め、Bさんの気持ちが落ち着くのを待った。しばらくして、「今日旦那さんは？」と尋ねてみた。事前にサポートしてくれる家族がいるのかカルテで確認していたからだ。Bさんは少し驚いた表情をしながらも、外を指さし、「今、受付で待っててくれています」と涙をぬぐい、ようやく笑顔を見せた。サポートしてくれる家族がいる。こうして自分の思いを素直に医療者に伝えることもできる。きっとBさんは大丈夫。そう感じるとともに、私はご主人のもとへ向かうBさんの後ろ姿を見つめ、心の中でエールを送った。



Bさんの事例を通して、あらためてAさんのことを思い出す。知識や経験を積むことは、もちろん大切である。しかし、どうしてあの時、私はAさんの不安な気持ちに寄り添おうとしなかったのか。たったひとこと声をかけることができなかったのか。私が目指す看護とは何だったのか。これは、本当に私の経験不足だけが原因で引き起こしてしまった出来事なのだろうか。「患者の気持ちに寄り添える看護師になりたい」という入社当初に抱いていた初心を大切にできていれば…。そう思うと、今でもAさんの表情が忘れられないし、これからも忘れてはいけないと思う。今度こそ、患者の気持ちに寄り添える看護師でいるために。